

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和5(2023)年
1月号

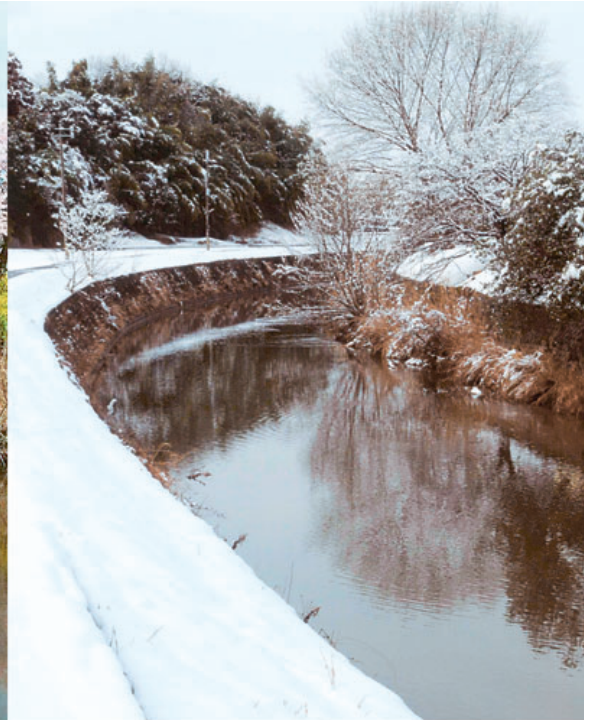
通巻629号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 令和5年1月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷 監製
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



▲平成25(2013)年4月号表紙写真



▲同じ所の冬景色

富雄川の岸辺、季節の移り変わり

奈良市 和田保さん撮影 (文 編集部・8頁)

新年号特集アンケート

あなたは暮らしの中で宗教をどう生かしていますか？

先着順掲載

大いなる流れに沿って

北海道小樽市 守谷 明宏

参加している全国サークル文芸誌に私はいつも小説モドキを発表しているのですが、昨年11月に書いた『源助爺』で、こんな言葉を主人公に語らせました。

「自然は偉大な存在だ。自然を神と言ってもいいし、宇宙と言ってもいい。この三つの言葉は同じ意味だからだ。農法では自然と言い、宗教では神と言い、科学では宇宙と言っている」

これが私の「宗教」の定義です。あの世というものはなくて、一般の人には見えないし聴こえないけれど亡くなった人は、いつも私達の側にいると思っていますが、私達人間だけでなく亡くなった人達、動植物も含め存在するすべてのものは、個々がそれぞれ神そのものであり同時に神の一部でもある。その総体として地球があり宇宙があり、その総体はまた「神」であり「仏」でもあるのだと思います。だから、特定の「神」「仏」を自分の外に置き、布教して信者とお金を集めだしたら、その宗教団体はおかしな方向に向かっている気がします。

「私は宇宙の愛に應えるために生まれてきたのだ」ということは、若い頃からずっと思っていました。その大いなる流れに沿って行けるように暮らしていきたい。しかし私は「たんばら」(北海道弁、短腹。短気をいう)なので、「本来の人(本人)」になれず、「凡人」の濁点がつまんでもとれません。

大倭の拝殿にいて感じる何か

京都市 加納 暉毅

裏のあぜ道を散歩していたら、もうちよつと賢い生き方をできなかったか、との思いが脳裏をよぎった。失敗の実例をもって、賢い生き方をしていたら良かったというのではない。失敗は重ねた。これからも身近だろう。多くの失敗とは別に、賢い生き方をしていないと感じたのである。ぼんやり重い感じだ。

人は生まれ出づる悩みを伴う。生老病死をはじめとする四苦八苦は明確な苦痛であり認識は容易である。しかし、なかなか気付かない、ふと感じられる反省意識のようなものが、人には染み付いていやしないか。

原罪は、かすかに感ぜられる反省意識のように、気付きにくく、かつ己の自由を縛っているものが根源になっっているのかもしれない。明確な罪、苦痛からの解放はもちろんだが、かすかに己の自由を縛っているようなものからの解放こそに宗教の真骨頂があるような気がする。

ふと感じる反省意識のようなものを心中から探し出すのは易しくないが、宗教の教えには、実はお前、こうなんだぞ、あるいは自分はこうだったんだと気付かせてくれるものがある。

言質による訓諭や教えのもと、持戒、慈善活動、修行などに真剣に取り組めば根源を探し出すことができ、それから解放される時が訪れるのだというのであつてほしい。解放された人は闊達であり、自分のみならず世の中を豊かにすると信じている。

今、巷間を賑わせている宗教団体についていえば、宗旨のみが魅力的で組織運営や信者獲得のために躍起になっているとの印象を受ける。そのよ

うなことに躍起になっている時点で、宗教の存在意義から乖離している。ただ、その団体は誰からも忌避されると思いきや、あにはからんや、しっかり入信者を獲得しているという。団体と信者の間には道理を超えた因縁因果が働いているとしか考えられない。

神の存在は識らないが大倭の拝殿にいて心地良いと感じる時がある。清涼を感じるのである。

法主さんに言われた言葉

あじさい色 中村 千久佐

今回のテーマほど難しく考えさせられたのは久しぶりです。

あの安倍晋三氏が奈良市で射殺されたのをきっかけに、自民党と〇〇教会との関わりが大きく取り上げられている今現在であります。

私は、ほんと今までずっと宗教の事など何も考えずに過ごしてきました。勿論未だに宗教が何かも分かりません。

大倭に生まれて育ちましたが、これが宗教だと言われた事も教わった事ありません。大倭教とは？と考えた事もなく大人になってしまいました。大倭で育った人がみんなかどうかは分かりませんが、私には法主さんそのものが宗教だったのかも知れません。宗教だと考えた事はなかったけれど、法主さんの言葉一つ一つにはそういう意味がこもっていて重みがあったように思います。周りの大人の人からもやれ宗教だのと聞かされた事もなかったのだからにきたのです。

法主さんは難しく私達には言わなくとも、いつも「みんな仲良うしいや」との言葉は、事あるごとに言われてました。最初聞いた時は、「なんやそんな簡単なこと」と思って軽く聞いていました。が、何が何だ簡単ではないんですよ。なかなか出

来る事ではなくホント難しい事だと実感する次第です。

あと、私が法主さんに言われた言葉で印象的だったのは、「人間には耐えられない試験は神さんは与えない」と。なので少しの不自由にもめげずに、そして自分の経験している苦勞などは、私には耐えられる試験なんだと思ひ直して頑張れる源になつていきます。

私の名前も法主さんが名付け親ですが、「千久佐」は「千草」と同じ意味やでと、でも「草」はなあ、踏まれても踏まれても強くたくましく立ち上られる、そういう名前やと言つてもらいました。また私が死んだ時も戒名にそのまま使えるように考えてるとも。ちなみに学生時代は古臭い名前と思つて嫌でしたが。(笑)

そして今は法主さんの後継者である教長さん(矢追家麻呂氏)にもたくさん教わる事が多く、「人の事は言わない」「陰口は言わない」など大切な事なのですが、難しくは言われません。法主さんと同じ感じでしょうか。大倭の中の草刈り、落ち葉掃除なども早朝から率先してやってくださり、大きな背中を見せられています。その教長さんを中心に、この大変な困難の中でも大倭が維持出来ているのだと感じています。

これが私自身の大倭教、宗教ではないかと自信をもって言いたいです。

1人の頃思ひごと

三重県四日市市 中村 勝彦

畑へ行って短い時間を過ごすのが、ささやかな息抜きの時間です。キャベツや白菜が少しずつ、結球していく姿を眺めるのはとても楽しく、その造形の妙に圧倒されます。法主さんの言われる生命エネルギーのなせる技とでも言いましょうか。

キャベツや白菜のように、生命エネルギーを存分に受けられる自分でありたいと、最近は思うようになりました。

私にとって、宗教とは、自我を抜け出し生命エネルギー（法主さんの言葉では宇宙創成の気—これは人間だけではなく天体を含むすべてのおやまと—）と融合する方法を探るものではないか、と思うようになりました。古来、さまざまな方法でこのようなテーマに人類は挑んできました。ある人は「滝に打たれ」、ある人は「瞑想」を、またある人は「南無阿弥陀仏」と称名をする。

私はこのような方法を否定するものではありません。ただ、自分にはしっくりこなかった。方法と言えるものではないかもしれませんが、法主さんの説かれた方法が、結果としてはしっくりきたと思います。

法主さんの方法と言っても、大倭には特に明確なものがあるわけではありません。法主さんが行かれた場所へ行ったり、実践されたことを形だけマネをしても身につくものではありません。ただ、残された膨大なお言葉、足跡、施設等を通して一人一人が自己研鑽の中で、察し、自分の肚に納められない、と思います。

私にとってはイイ言葉が、いっぱいありますね。武術の説明で「型から入って型から抜ける」とか「相對は即一体である」「還元帰一」もそうだと思う。もちろん、まだその意味を十分つかんではないと思います……。

生命エネルギーとの融合を目指して、自我を殺して没入するだけだと、これはこれで危険なところもある。そもそも没入する対象が生命エネルギーなのかも確証は何もない。自我を殺さず自我を生かして自我を抜く、こんなことができるのかわかりません。単なる願望でしかありませんが：

。情けないことに自身、日常の生活の中で悪戦苦闘して、未だに生命エネルギーとの融合どころか、自我の海におぼれている状態です。ただ、おぼろげながらも、光を感じる、というか、方向性がわかる、というか、そんな感じですよ。

日々の生活はもちろん、現在、日本が直面している政治、経済、社会、環境問題などに加えて、世界が直面している諸問題についても無関心ではおれないし、「生命エネルギーとの融合」などという一見、お花畑のような言葉は言い出しにくい時代でもあるかな、とも思います。

その言葉にいかにもリアリティを感じるか、は自分の問題です。私はお花畑のような言葉にならないよう、土を耕したり、自分の生活の糧を得ている仕事を重しにして自分が羽が生えて飛んで行かないようにしているつもりです。うーん、核心を突いたうまい言葉にならない。以上「思いつくまま」を書かせてもらいました。（編集部から寄稿を頼まれて書き始めましたが、自分ながらなんと抽象的な文の羅列か！と情けなくなります）

日常の中に宗教は自然にある

三重県名張市 服部 洋平

私も人間には、宗教が必要だと思えます。私の日常の中にも自然にあります。毎日、仏壇に水を供え、線香に火を灯します。感謝の祈りをして、亡き父母に少し話しかけます。何か、お願いをする事はありません。ある人が「感謝をするにもセンスがいるのかもしれない」と言っていました。私には、センスがないので、宗教・祈りの対象は、とても大切です。

昨年4月に大好きな父が亡くなりました。亡くなるまでの9年間、働きながら在宅で父を介護しました。大変な時もありましたが、とても幸せな

日々でした。しかし反省もあります。もつとしてあげる事が出来たのではないかと……。いつも仏壇に「ごめんなさい。ありがとう」と言っって手を合わせています。私には霊感がありませんので、霊を感じたり、死者の声が聞こえたりする事は一切ありません。おそらく死ぬまでないだろうと思います。しかし、大切な亡き人達への思いは、いつまでも持っていたいと思います。死んだからと言っって絆が切れたとは思いたくありません。

「思い出す事が亡くなった人への一番の供養」と言っっていた人がいましたが、全くその通りでしょう。私自身、亡き父・亡き母・先に霊界に行っただ人達の事を思い出します。

私には宗教は必要です。亡き父・亡き母を思い出し、手を合わせて感謝の祈りをする時、私の心の中に皆生きています。私にとっとても大切な時間です。

「仲良く」よろしく！

北海道室蘭市 佐藤 明子

私にとっとても書きづらい内容です。しかしながら、以下なんとか考えて綴っってみました。

「日々大倭の教えに沿っって暮らしていないので、このアンケートに答えることは難しかったです。毎月の機関紙「おおやまと」を拜読することで自分の心を少しでも教えに近づけるよう修正しています」。以上アンケート回答。

締め切りに間に合いますでしょうか？ 全然上手く生きていくことができない私ですが、来年もこんな私とどうぞ「仲良く」してください。

◆新年号だけでなく、次月号以降もアンケートを続けることにします。どなたでも、いつでもふと気の向いた時に原稿をお寄せ下さい。（編集部）

こ
だ
ま
こ
と
だ
ま

▼滋賀県大津市 樋口寛美 令和4・9・8

『とおやまと』7・8月号と、法主さんの話し方を読んで誰にも説得力のある話し方やなああと。ふいに男の会話と女の会話の違いに気付いた。昨日もお隣の女性(80代)とその知人(70代)が玄関を挟んで話していた。私がスーパーに買い物に行つて帰ると、多分30分、やはり同じ姿勢で話が続いていた。また5日くらい前も、4軒先の40代オカアサンと生協配達女性が、私が郵便局に行つての間、20分程度同じ姿勢で話し込んでいた。

夕方右向かいのご主人が玄関ピンポン、野菜のお札にとんかつ弁当をいただく。玄関先でチョット野菜のこと話したが3分とかからなかった。女性の会話と男性の会話は全く違う、なんでやろ? 女性同士の会話が「井戸端会議」など揶揄されるが、本当にみんな無駄話だろうか。少し盗み聞きすると、始めに挨拶とディテール(細かい事情)が聞こえる。用件(結論)より、その会話が長く、生協など届け物でもそんな会話が注文につながるそう。決して無駄話ではない。

『とおやまと』の法主さんの講演や法話の話し言葉を目で見ると、ディテール(事件事情)が見事にはめ込まれて、一つ一つの結論が分かりやすくなっている。霊界との交流話も見える日常生活話のように当たり前に続く、そして全然違和感がない。神さんはこんな会話方式を持っているんだな!と妙に感心した。

▼青森県弘前市 石田勝利 令和4・10・13

毎月楽しみに読ませてもらってます。
津島修治とは小説家「太宰治」の名前なのです

が、ペンネームの詳細は意外に知られてないのです。今年8月、解明して新聞に載った。

生家「斜陽館」近所の金木八幡宮境内に天満宮が祀られ、幼少の頃から菅原道真に憧れて生育したという。没後74年経過して皆さん納得。

ちょうど届いた『とおやまと』9月号の、法主さんの書かれた文中に「杉山龍丸さんとの思い出の地、太宰府天満宮の神地を散策した」とあり、写真も掲載されていたので、何かしらタイミング、ピツタリ! 妻の実家の隣に鎮座する青森県でここ1ヶ所の天満宮です。

▼神奈川県横浜市 加藤彰彦 令和4・12・29

いつも『とおやまと』ありがとうございます。12月号の佐渡ヶ島への旅、行きたかったなあと思いつつ読みました。杉本さん、高倉さん、永坂さん、齋藤さん、高橋さん……皆さんのもの一つ一つ心に残ります。

厳しい時代ですが、もう一つの世界がじつくりと次の時代を準備しているように感じます。来年は次への大きな動きが始まると思います。大倭、長野、沖縄、そして田谷町をつなぎ生きたいです。よいお年を。弟(勝彦)が亡くなり喪中です。ではまた。

＜最近の著作 ペンネーム野本三吉＞

・寿歴史研究会編『横浜寿町く地域活動の社会史』執筆者の一人として

・月刊『公評』連載「水滴の自叙伝」単行本になる予定

▼新潟県佐渡市 大滝哲也 令和5・1・6

【編集部より・新潟・佐渡方面、大雪のため配達停止で『とおやまと』発送が遅れます。また停電のニュースで案じています。

12月号佐渡旅行の記事、出来上がって早々、李章根さんに「美姫(次女)は間違い、舞姫(長女)さんが正しい」と指摘されました。原稿が「ミキ」さんだったので編集時に漢字を当てたのですが、校正時、何人かの眼を見事にすり抜けてしまったようです。 令和4・12・23】

いやいや大変でした!! 佐渡でも我が家のある山間地は特にひどかったようです。ネパールは停電の多い国でしたが、こんなに何日も続くということはありませんでした。結局、19日未明から26日の午後までの7日半も! 我が家にはロウソクがたまたまあったし、調理と暖房は元から電気依存してないのでまだましでしたが、電気炬燵とファンヒーターしかないような家はもっと大変だったろうと思います。

その間、情報が全く入らないので、世の中で何が起こっているのかさっぱりわからない。26日の午前中には市役所の職員さんが救護物資を持って来て下さいました。そのとき電話(インターネットと共通)がつながらないのはうちだけではないということがやっとながかりました。それは昨日午後によつとながかりました。今の世の中これがないと何もできないということがよくわかりました。

『とおやまと』は1月1日に届きました。私も幾つかミスを見付けましたが、他の人の文章は校正ではなく読み物として読んだので、すみません、これは見落としてました。

それと、サンペイチャンは甲斐犬かいけんだとあの時、小耳にはさみました。黒柴犬でないかもしれない。私は法主さんの紀州犬のお世話をしていたので、日本犬のことは少し知っていますが、これは要確認です。

「神通力如是」の真意をさぐる

第二十三回

大倭教の源流にさかのぼって

前文

この連載を継続的に読んで下さっている方には自明のことでしょうが、念のために「神通力如是」の中で「天皇」とか「皇居」とかいう言葉がどのような使われているかを再確認しておきたいと思えます。

「天皇」にスメミマとかスメラミコトというルビをふっていることから想像できるように、ここでいう「天皇」とは時の権力者が偽造した「現人神」とか覇権を求める権力志向の存在のことではなく、古代から連綿と続く「神ながら」による指導者のことです。また、「皇居」とは、主に東京の中心にある皇居のことではなく、大和の鴨杜の、大倭神宮のことを指しています。

今回の原文を表面的に読んでしまうと、無謀にも侵略戦争に突入していった軍部などの支配層のイデオロギーであった皇国史観と見誤る危険性があるので、あえてコメントしました。

なお、以前にも本紙で紹介したことがある法主のスメラミコトに関する文章を再掲して理解の一助とすることにします。

《この頃の大倭地方は農耕を主体として聚落が各地にあつて、現今の大倭に在る「紫陽花邑」の如きいわゆる「神ながら」の集団生活が営まれていた。土地は神が造られたものとの信仰をもって、個人の所有権など勿論約束されていなかった。

で、自然と共同耕作によって生活の糧にした。いわば大家族構成によって現われた共産生活体ともいえるのだが、この集団には必ず統治の責任者といった頭の位置を意味する「すめらみこと」が厳存していた。この頃の「すめらみこと」の資格者は、各々その人なりの霊能力をもっていたので自分の分をよく知っていた。

したがって根幹枝葉の姿の如く自ずから中央集権的な組織が合議制でなく、「神ながら」にできていた。多色彩をもった各集団(邑)が神意に応じて調和を保ち、無統制にして一糸乱れない統制のある、「大らかにして、和やかな」理想社会をなしていたといえる。

彼等は祭政一致をもって生涯を貫いていた。即ち霊界現界を一体とした思想とも見られる。彼等はまた何かの霊感があれば直ちにそれが自然霊であれ、人格霊(祖霊)であれ、更に動物霊であったとしても、誰一人異議をはさまず挙げて祭祀し「まつろう」(順応)喜びを賑やかに捧げたものである。

邑にある「すめらみこと」(『日本書紀』には君は神から受ける霊威によって統治の任を完うし、邑人達に対しては日常生活の総親であり、指導者であった。)

(野草社『やわらぎの黙示』129～130頁)

また、「現代語訳」の後に『天皇とスメラミコト』についての補記」という三人の会による小文を載せましたので、併せて参考にして下さい。

原文

十一月十八日、午前七時半、於鳥見庄山

「倭姫、オン前ケガシ奉ル。拙ナキワザニテ候ヘトモミ神楽ソウシマツラン。オメザハリオ許シアレ」

「君ガ代ハ千代ニ八千代ニトコシヘニ、我ガ日本ノ天皇ノ大内山ニ色ハエテ、我ガ日本ノオン榮エ、代々永久ニ弥榮エ、我ガ天皇ノアタタカキ、オンナサケ、ハ紘一宇ヲ照スナリ。アーアリガタヤ日本ニ、生レキタリシモノハミナ神ノ加護アル。ウレシヤナ、アリガタヤ。」

①臣民ヨ、汝等ハ我 天皇ヲ親ノ如クニシタイ奉リ、親ノ為ニハ吾身ヲ供養シ、命ヲ捨テテ親ノ為、盡(※つく)スガ之レゾ人之道。今我ガ日本ハ悪魔ニノロハレテエー我ガ天皇ノ側ニハバル者ハ皆悪魔ノ変化ゾカシー国民ヨ、心ヨリ天皇ノ御為ヲ思フ人ヲバ側ニヨセー君ノマモリイタサネバー悪魔退散ナシ玉ヘ、悪魔退散ナシ玉ヘ。八百萬ノ神等、大倭日高見国、生(※うま)シ玉ヘ。

大倭登比能毛利、天ノヌボコガネテキルゾ。一日モ早クコノヌボコヲオコシ、真ノ正法、妙法トナヘ、悪魔怨敵退散ナサシメ、天皇ヨ、アンジ召サルナ君ニハ八百萬余ノ力強キ加護ガアル。オアンジ召サルナ、天皇ヨ、今ノ世ハ麻ノ如クニ乱レキテ真ノ道ヲ説イタトテ、ワカル人ハ数少シ。世中転倒シテ裏返リ真ノ道ハオシ込メラレ、マチガッタ道ガ今ノ世中ノ秩序トシテシカレ、正シキ者ハ用ヒラズ。イザ、真心ノモノ集ヒ、真ノ妙法ノ剣モテ、悪魔退治ナシクレン。聖壽萬歳、萬萬歳」

「吾ガ命、君ノタメ捧ゲマツルガ国民ノ、マコトノ道デアルゾカシ」

「埋モレ玉ヘル歴代ノスメリマ、ソノ御血ノツナガリ玉ヘル、皇子、皇后、御君等モ世ニ出デタキコトニテ候、今シバシオン待チ下サレ。大倭日高見国、登比能毛利コノ世ニ生レ出シ其ノ時ハ、オン君等モトモトモニ、ヨニ出デ玉ヘ。其ノ世ニ出シ玉フ御時ハ天ノ沼矛ノ立ツ時ゾ、我が日本ノ天皇ノ御榮エ、代々永久ニ弥榮エマサン。埋モレ玉ヘル天皇皇族ノ為、題目供養。」

埋モレ玉ヘル君タチコノ題目ノオンカニヨリ一日モ早ウ世ニ出デサセ玉ヘ」題目、挨拶、倭姫。

附言、朝の御神拜の時「空襲」と字にて出る。今晩三時半頃、「空襲」と字にて現はれ、地響き空襲の実相見ゆ。日聖、云、右は実相也。敵国不明なるも、此時我日本空襲の計畫を為す。実現か否かは不明なり。之れ敵国の思が幽界に一相となりて現はれている故なり。

註釈

①臣民(シンミン)

君主国の人民。特に明治憲法下で、天皇および皇族以外の国民。(大修館書店『明鏡国語辞典』による)

(1) 君主の臣下たる人民。

(2) 明治憲法のもとで、天皇・皇族以外の者。森有礼、学政要領「初等教育は我国臣民たるの自分を弁え(わきま)へ」(岩波書店『広辞苑』による)

②吾身ヲ供養

供養—ささげまつる。(自分自身をスメラミコトにささげる)

③空襲(くうしゅう)

航空機で地上目標を襲撃すること。(小学館『大辞泉』による)

「神通力如是」の「神語り」の最終日は12月8日となっている。この日、太平洋戦争が始まった。「空襲」は、この日の日本軍による、真珠湾奇襲に始まる。

日本の本土が初めて「空襲」を受けたのは、昭和17年4月18日。アメリカ軍のドーリットル

中佐指揮のB25が、太平洋上の空母から発進、東京など5都市を目標として奇襲したのが日本初空襲だった。

現代語訳

倭姫「倭姫です。御前をおじゃましたします。つたない技量ではありませんが、御神業を任ります。お目障りになりますが、お許し下さい。

天皇の代は永久に続きます。私共の日本の天皇のおられる鶏杜(大倭神宮)はすばらしく、私共の日本の御威光は永久に輝きゆきます。私共の天皇のあたたかな御心は世界を照らします。ああ、ありがたいことです。日本に生まれてきた者は皆、神の御加護があるのです。嬉しいことです。ありがたいことです。

天皇にお仕えする人々よ。あなた達は私共の天皇を親の如くにお慕いし、その親の為には自身の身を捧げ、命を捨てて親の為に尽くすが、すなわち人の道なのです。

私共の日本は悪魔に呪われていて、私共の天皇の側にいる者共は皆、悪魔の化身身なのです。国民達よ、本心から天皇の御為を思う人を天皇の側に仕えさせ、天皇をお守りいたさなくてはなりません。悪魔を退散させたまえ、八百万の神様方、国を鎮める神々(霊界人)のおられる大倭日高見国を現界に出現させて下さい。

大倭鶏杜に隠る大倭太加天腹の霊界よ、天の沼矛は眠っていますよ。一日でも早くこの沼矛を起しし神代再現の為、真の正法である妙法を唱え悪魔怨敵を退散させて下さい。

天皇よ、心配されることはありません。あなたには八百万余の力強い加護があります。ご心配なさらないう下さい。

天皇よ、今の世は麻の如くに乱れていて真実の道を説いても、分かる人は少数なのです。世の中は転倒して正しきものと正しくないものが逆さまになっており、真実の道は見えない所に押し込められています。誤った道が今の世の中の秩序として行われており、正しき人は用いられることはないのです。

さあ！(今こそ) 真心を持った者達が集まり、真の妙法を剣として、悪魔退散を行いましょ。聖寿万歳、万々歳！

『(※以下歌であると思われる) 自分の命は天皇の為に捧げるのが国民の誠の道であるのです』
世に埋もれていらした歴代の(大倭の)天皇、またその血につながっておられる皇子、皇后、その他の皇族の皆様も世の中(現界)に出現されたことでしょうか、今しばらくお待ち下さい。

大倭日高見国である鶏杜に隠る大倭太加天腹がこの世に生み出された時には、(※埋もれている)皇族の皆さんも一緒に世の中にご出現下さい。その様に世の中に生まれてこられる時が天の沼矛の立つ時なのです。

私共の日本のご威光は代々永久に輝いていきます。世の中に埋もれておられる天皇、皇族の為に題目を供養いたします。

世の中に埋もれておられます天皇の方々、この題目の御力によって一日でも早く世の中に現れて下さいませ」題目、挨拶、倭姫。

附言

朝の御神前の礼拝時「空襲」と字にて現れる。今日の早朝三時半頃、「空襲」と字にて現れ、地響きして空襲の実相が見えた。

日聖が語る。右の事は事実の映像であり、(空襲する)敵の国は分らないが(実相が見えた)

この時は、その敵国が私共の日本を空襲する計画を立てていたのである。

実現するかどうかは、今の時点では分からないが、この事はその敵国の現実の想いが霊界の相となって、映像として現れたのである。

「天皇とスメラミコト」についての補記

「前文」に記述されている如く、古代において熾然と存在したスメラミコトを中心とした顕幽に亘る世界観を持った社会は、いつの頃からか失われてしまった。天皇の名称を使用したのは、中国思想に詳しい天武天皇が最初だと思われるが、小学館『日本大百科全書』には「：七世紀ごろ大和(やまと)朝廷の大王(おおきみ)が用いた称号に始まり：」とある。その頃には、すでに顕幽を共に生きる社会制度は全くその姿を消してしまっていた。

それから様々な変遷を経て連綿と続いてきた天皇の存在だが、近代において明治国家が誕生してからの天皇もまた、名目こそ統帥権を持つ君主ではあったが、薩長その他権力を握った者達によって担ぎ上げられ、利用される存在に過ぎなかった。天皇が如何に己の意思を通そうとしても、それを阻む多くの取り巻き(軍人、政治家、侍従者等)である、「神通力如是」でいうところの悪魔の化身によって牛耳られ続けていた。

さて、倭姫が呼びかけ続けている昭和天皇に、スメラミコトとしての認識があったか否かは定かではないが、脈々とつづく天皇の血統、あるいは霊統のどこかにスメラミコトとしての自覚が内在していたかもしれない。

最近の新資料による研究では、昭和天皇による戦争回避の実態が明らかにされてきているが、そ

の中にも天皇の戦争回避の行動を邪魔しようとする軍人等の活動が見受けられる。

そして、この天皇と悪魔の变化身達との拮抗する動きそのものの中で、日中戦争、太平洋戦争が起り、やがて日本を破滅へと導いてゆく。

そしてまた、それこそ昭和20年8月15日の日本の終戦、大倭教の立教開宣へとつながる昭和維新の幕開けとなってゆく。

法主は、次のように書き記されている。

『昭和二年の春、私(十七歳)は中学三年から四年に進級する時であった。四月のある日の朝、私の人生を左右するような重大な祖神からの靈示があった。私は驚き、否定もした。宗教で立つなんて真平であると反駁した。この時の靈示は自分が信じられない誇大妄想だったので親達にも話していなかった。それというのは……』

「今から二十年たてば、天皇は地に落ち、世は乱れて光なし、人々は神意に逆らうために、天災地変が起こってくる。

この時に汝は『神ながらの法』を説いて立て。汝は神議りによって、時を見て人界に天降りたる使命の人であることを自覚せよ』

当時の人々の中に、こんな大戦が起こり、日本が敗けるなんておおよそ想像も及ばないことだったから、私は精神分裂ではなかるうか、とひそかに疑惑と恐怖を抱いたのも無理からぬことであつた。』

(野草社『やわらぎの黙示』219〜220頁)

以上の文章は、つまり長らく続いた覇権的な、あるいは傀儡的な天皇制の終焉とともに、新たなスメラミコトの復活を告げているのではないだろうか。

あじさい日誌

12月11日 朝8時から大倭墓地の大掃除、9時から紫陽花邑で掃除。安宿苑の職員、大倭会、NPOむすびの家関係等々、邑の内外の皆さんが参加。故平田弘之さんの長男、太一さん(東京)も来られていました。

12月15日 大倭神宮月次祭。月次祭とは知らずに、神戸市の楠(男性)さんが来られました。神宮には一人で何度かお参りされていたとか。

12月23日 大倭元旦。雪混じり、寒さの厳しい一日でした。

午前10時から法主奥津城で日聖祭開始のご挨拶。10時半から拝殿において日聖祭祭典が行われました。祭主の矢追家麻呂教長、岸田哲大倭会会長が挨拶をされて終了。引き続き邑の守護霊さんの拝所(四ヶ所)に、新年のご挨拶に回りました。

この日、教長さんより参拝者の皆さんに対して「今年から大倭紫陽花邑代表は矢追明昌が務めます」との報告がありました。

松尾俊一・元子夫妻(静岡県浜松市)と高倉敦子さん(熊本県水俣市)は大倭会館に連泊して大倭神宮の大掃除にも参加して帰られました。

12月25日 9時から大倭神宮の大掃除、午前中で終了。

12月31日 午後1時から邑の男

性組によって大倭神宮の年始祭用お供え物の準備、拜殿用飾り付けが行われました。

夜11時55分頃から、祓い清めに1ヶ月を1回として12回、山崎晴晴・山崎奈紀佐・青山法義さんにより拜殿の大大鼓が打ち鳴らされました。

1月1日 大倭神宮年始祭。1月5日 午前11時から紫陽花邑事業関係者の事始めの会。コロナの関係で各部署の代表者のみ参加して行われました。

1月6日 大倭神宮月次祭。この日は河内長野市の金澤秀郎さんが参拝されました。

夜、大倭会館で邑倭の会。大倭安宿苑では12月27日 各種団体表彰の記念品授与式を中止。各施設で施設から渡ししました。

12月29日 1階テラスにて職員が餅を搗くの

を、近くで見ると窓越しや2階のベランダから見ると分け

て楽しんだ後、美味しく食べました。

法主帰幽祭のご案内

日時 令和5年2月9日(木) 曜日

●午後1時40分より法主様奥津城においてご挨拶をいたします。

●午後2時より大本宮拝殿においてお参り後、過去の12月23日の降誕祭の映像記録を見ていただき、その後教長さんのお言葉をいただきます。

●密集・密接を避けるため、ご配慮・ご協力のほど、どうぞよろしくお願いたします。

宗教学人 大倭教

クリスマスも兼ねた行事食。12月25日 職員の楽器演奏が大人気でした。

(長曾根寮) 12月19日(特養)クリスマス会。ライブでゲーキのデコレーションをして皆さんに分け、手製の飛び出すクリスマスカードをプレゼントしました。

12月24日(デイ)クリスマス会。バイキング食、創作DVD鑑賞、作品づくり等。

(茂毛路園) 12月23日 クリスマス会。職員が変装したサンタが登場。記念写真も撮りました。

(八重垣園) 特に変わりありません。

表紙写真によせて

編集部

撮影者の和田保さんには長年『とおやまと』の表紙写真をご提供いただいています。昨年11月号の表紙写真「天理柳本、崇神天皇陵より二上山遠望」もそうでしたが、すぐに和田さんからが出来栄えがよろしくないのではとお電話がありました。長い間、パソコンに保存していた写真のデータを引っ張り出したのですが、最初から印刷の担当オペレーターの上本聡司さんは「ちょっと荒い」など違和感のあることを指摘。しかし見た目には違いがそんなに分からないだろうと、ついゴーサインにし

ました。和田さんにはご容赦いただいて、また何かいい写真がないですかとお願いすると、幾つかご持参下さいました。で、今月号はその中から選びました。という状況です！ 皆さん！どうぞ表紙写真とか絵とかお寄せ下さい！

あんない

*玉緒祭(大本宮) 2月3日(金) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

玉緒祭は宇宙根本神霊と人間の本霊との結び感謝するお祭り。玉は命を、緒はひもを言う。

*月次祭(大倭神宮) 2月6日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

*法主帰幽祭 2月9日(木) 上欄参照。

*大倭会主催祝会 2月12日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

*月次祭(大倭神宮) 2月15日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

*申孝祭と月次祭(大本宮) 2月23日(祝) 午後1時20分より大倭神宮にて申孝祭が、2時より大倭大本宮拝殿にて月次祭が行われます。

申孝祭は、神武天皇が行った祭政一致の故事、鳥見山中の霊時を記念するお祭りです。